SAMPLE 試読　テスト

SM小説　亜由美シリーズ５

安里咲

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

NOT FOR PUBLIC RELEASE

NOT FOR
PUBLIC RELEASE

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネット上では「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の虐待的なＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

目次

はじめに　８
主な登場人物　１１
嫌われ者でもいい　１４
突然の危機　５７
縄に絡め捕られて　６５
レイプ願望　８０
理不尽な快楽　１０１
強姦で輪姦　１３２
女子寮　１６２
寮長　１９４

NOT FOR PUBLIC RELEASE

奴隷として　２０５
女子寮のペット　２４６
訓練　２７０
フェラチオ強制調教　２９０
清掃作業　３１３
安里咲犬　３３５
乳房打擲　３５７
性感訓練　３６８
買い出し　３８０
夜　４０３
崩壊　４１８

NOT FOR
PUBLIC RELEASE

マシーン　439
拡張　457
膣圧　472
貸し出し　485
奥付　510

NOT FOR PUBLIC RELEASE

はじめに

本書は、亜由美シリーズの一冊です。「亜由美　第三部」に登場した安里咲を主人公とした作品です。「亜由美シリーズとして同じ世界観で描かれています。

独立した作品としてお読みいただくことも可能ですが、登場する人々や場所の多くは、ご存知であることを前提に書かれていますので、その点はご容赦ください。

剛介たちは亜由美がパルダ王国に留学の名目で人質に取られたため、新たな奴隷を必要としていました。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

また、剛介には亜由美を取り戻すために、交換条件としての新しい奴隷を必要としていました。亜由美の立場は「亜由美　灼熱編」をご参照ください。

そして剛介は、次の犠牲者として安里咲に目をつけたのです……。

亜由美シリーズ

1、小説『亜由美』第一部

2、小説『亜由美』第二部

3、小説『亜由美』第三部

4、『亜由美』灼熱編

NOT FOR PUBLIC RELEASE

5、『安里咲』１（本書）

6、『安里咲』２

NOT FOR PUBLIC RELEASE

主な登場人物

わたし（安里咲）　亜由美と同じ大学の新入生。亜由美の拷問実験に参加した。

登美子　佐智子　映奈　亜由美の「拷問実験に参加した女子大生。

剛介　亜由美が憧れた先輩。「亜由美の会」を作る。

末土教授　亜由美に興味を持ち、拷問実験を企画して

NOT FOR PUBLIC RELEASE

実施。

野川陽子　末土教授の夫人。事実婚。

渡辺奈美　女子寮の寮長。柔道経験者。

三上彩芽（あやめ）　ゲー研初の女子部員。女子寮に住む。寮長の助手的存在。

珠緒　かつての安里咲のバレエ教室の友人

ミハイル・マーコフ　ロシア系のバレエ教師。安里咲

NOT FOR PUBLIC RELEASE

の初恋の男。

ゲー研　大学のサークル。剛介の提案で、亜由美のゲームを作った。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

嫌われ者でもいい

わたしは、大学に近いカフェで、居心地の悪い思いをしていた。

五月六日。金曜日。ゴールデンウィークはこの週末まで続く。のんびりとした町は、いつになく大人びて、地元に残っている人たちのくつろぎの場となっていた。

初夏の日差し。空まで広くなったように見える。

アイスカフェオレの氷が溶けてしまっている。

「安里咲、なにがあったの？」

テラス席で登美子、佐智子、映奈に囲まれる。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

彼女たちの圧力に耐えられない。

大学に入ってから、限られた数人以外とは、あまり打ち解けられなかった。登美子、佐智子、映奈と親密になったのは、つい三日前のことだ。

末土教授の誘いに応じてアルバイトだと思い、ある実験に参加した。それは心理実験のようでいて、一人の女性を徹底的にいたぶる、拷問ショーだった。

あれがすべて芝居だったとしても、心には深い傷が残っている。

あんなものに参加しなければよかった。少しでも大

NOT FOR PUBLIC RELEASE

学に溶け込もう、チャンスがあれば教授や新しい友人と自然に話ができるようになりたい。そんなわたしの願望は、みごとに裏切られた。

昨日、耐えきれず亜由美を見捨てて実験から逃げ出してしまった。

彼女のことが心配でならない。だからといって、自分になにかができるわけでもない。

せっかく直接、亜由美と話をする機会を与えられたのに。のような体を破壊するような暴力を、彼女は自分から求めていた。

どうしてあそこまでするのか。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

理解ができなかった。

演技などといえる範囲を逸脱していた行為……。たくさんの黒人たちに犯され、鞭打たれ、焼かれ……。

思い出すだけでも、ゾッとする。

「黙ってちゃ、わからないじゃない。

あのショックからまだ立ち直っていないのに、早々に実験から逃げた登美子たちに呼び出された。

どうしたわけか、彼女たちは、わたし一人、あのあと末土教授のもとに戻ったことを知っていた。

「あれって、ウソだったのよね？　教授と亜由美は結託して、わたしたちを笑い者にしたわけでしょ？」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

トゲトゲしい口調だ。
忌まわしいことに関わってしまった怒りの裏返しであり、同時に、自分たちは悪くないのだ、と信じたい気持ちからくる歪んだ心理ではないか。
そう感じたが、口には出せなかった。
耳元にはいまも、息絶え絶えの聖由美の声がこびりついている。
「だって、わたしは拷問の実験台なのよ。死んでしまったら実験ができなくなる。あの人たちはプロなのよ」
そう言って笑っていたのだ。殺されたりはしない、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

プロがやるのだから大丈夫だ、と。
そんなことはない。
絶叫を続けたために枯れてしまった声。
焼けた棒を乳房に押しつけられ、スタンガンを浴びて悶絶していた亜由美……。
皮膚は焼け、腫れ、裂けて、特殊メイクではない。わたしの目の前で加えられたに、たくさんの傷……。
いま頃は、死んでしまっているかもしれない……。
見捨てなければよかった。
後ろめたさがあった。
ところが、目の前の三人はどうも、そうではないよ

NOT FOR PUBLIC RELEASE

うだ。
「あんた、教授とどういう取り引きをしたの？」
「え？」
「そうよ。あとで考えたら、あれって四人のうち最後に残った一人を選ぶための芝居だったんじゃない？わたしたちはまんまと騙されたの！」
彼女たちは、傷ついた亜由美を直接見ていない。マジックミラー越しで、作り物じみた拷問室を見ていただけだ。それは生まれてはじめて見る陰惨な光景だった。同時にパソコン画面の中の、ゲームのようだった。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

わたしは、あの部屋に入ったから知っている。
亜由美は傷つき、汗や小水にまみれていた。男たちはムッとするようなケモノじみた体臭を発していた。あの部屋は恐怖そのものだった。
あれは、ホンモノだった。
それを彼女たちに語ることなんてできない。だから、返事ができずにいた。
「安里咲はあそこに戻ったんでしょ？　なにをしたの。なにがあったの？　なにを黙っているの？」
「なんにもありませんでした」
「なによそれ。そんなわけないじゃん」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「そうよ。よっぽどいい目にあったんじゃないの？」
「あなた、教授のお気に入りになったんじゃ？」
「違います」としか答えられない。
末土教授のお気に入りになるなどとんでもない。
「いい。わたしたちは選ばれた四人なのよ。あなただけ、抜け駆けしたんだから、報告する義務があるわ」
「なにがあったのか、言いなさいよ」
「ズルイわよ」
よく、そんなことが言える。ため息をつくしかない。
「教授に聞いてください」
やっと考えついた答えだった。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「ええ。そうするわよ。レポートを出すときに、わたしたち、徹底してこのことについて、教授をつるし上げるつもりよ。場合によっては大学に訴えるかもしれないわ」

そんなことをしても、亜由美が救われるわけではない。彼女たちはまったく亜由美のことを心配していないのだ。

なんのために教授を糾弾するのか。

亜由美のためではない。自分たちのためだ。

あの教授も、あれだけのことをしたのだ。大学を去ることも含めて、たいがいのことを計算しているはず

NOT FOR PUBLIC RELEASE

だ。
「安里咲じゃ話にならないわ」
「わたしたちだけで考えることにしましょう」
「安里咲、あんた一人で抜け駆けするんじゃないわよ」
三人が、黙っているわたしをあらためてどこかへ行ってしまうと、少しホッとした。
彼女たちは友だちとはいえない。顔見知りではあるが、あの実験ではじめて知ったのだ。彼女たちも亜由美に酷いことをした。わたしも、亜由美を痛めつけた。助けることができなかった。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

その罪悪感をあの三人は、わたしにぶつけ、今度は末土教授にぶつけるらしい。

わたしは誰にもぶつけられない……。

この罪悪感から逃れることはできない……。

帰ろう。ここにいてもしょうがない……。

そう思ったとき、テーブルに影がさした。

見上げると、爽やかな笑みを浮かべた男子がいた。

「こんにちは。剛介です。失礼ですけど、安里咲さんですよね」

「え？」

「すみません。ちょっとだけ時間、いただけません

NOT FOR PUBLIC RELEASE

か？」
「なんのことでしょう。わたし、帰るところなんです」
「末土教授の助手をしているんですはく」
「えっ」
「ちょっとは興味あります？　ちょっとじゃないんです。教授からの頼まれごとなんですけどすぐ終わりますから、聞くだけ聞いてください。そしないと、今度教授があなたに会ったときに、確認すると思うんですよ。ぼくからなにか聞いていないかって。安里咲さんにとぼけられたら、ぼくが困っちゃうんで……」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

学生証を見せてくれた。剛介は学生で、一年先輩だ。いい加減なことを言っているわけではないようだ。

亜由美のことが知りたかった。彼女がどうなったか。無事でいるのか。あのあと、ちゃんと治療されたのか。大学には戻ってくるのか。

それにあのような実験をした末土教授のことも知りたかった。ほかの三人ではないが、場合によっては警察に通報しなければならない。

「ちょっとだけ助手をしていた亜由美という子がいたんですが、ご存知ですか？　彼女は今後は講義に出られないらしいので、新しい助手が必要になるんです」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「それって、実験の助手？」
あまりにわたしの表情が険しかったのだろう。剛介はびっくりして「実験？　どんな？」と慌てていた。
「実験のことは知らないけど、講義の助手について、あなたがいいんじゃないかって教授に言われたのです。打診しておいてくれと」
「どうしてわたしなんですか？」
「教授が写真つきでメールをくれたんで……」
いつの間に写真を撮られたのだろう。
あの実験のときではないか。あの実験の被験者はわたしたちだった。だからモニタールームにいた間、ず

NOT FOR PUBLIC RELEASE

っと撮影されていたのかもしれない。
「あれっ。教授のことをご存知だと思っていました」
知らないわけではない。ただ、公にすべきではちょっとはばかられるだけだ。
「前回の講義には出ましたか？」
「ええ」
「そのとき、教授が学生を一人、壇上に呼んだんですけど、覚えていませんか」
「ああ、そうですね、亜由美さん」
「そう。犬の首輪をしていた彼女。覚えていたなら早いです。彼女の代わりが必要なんです」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「亜由美さんになにかあったんですか？」
もし本当に末土教授の助手なら、剛介は実験や亜由美について知っているはずだ。
あのあと亜由美が重傷で入院したか、最悪の場合は死んでいるかもしれない。
すぐに席を立ちたいが、確かめてからでも遅くはない。もし末土教授が犯罪的な行為（そうとしか思えないのだが）に手を染めているのなら、告発しなくてはならない。
問題は、亜由美だ。
彼女がピンピンしていて、すべてを笑い飛ばしたら、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

バカを見てしまう。亜由美になじられるかもしれない。

「あなたが余計なことをしたから、わたし、とんでもなく恥ずかしいことになっちゃったじゃないの」

あの実験は限られた空間で実施されていた。関係者も少ない。それでいて、秘密にする気はないようだ。なにしろそのことをレポートにして提出しろというのだから。

だとすれば、わたしが考え過ぎなのかもしれない。

「大学なんだよ、ここは。そんなことあるわけないじゃん。すべてお芝居なんだってば」

亜由美がいまにも、そのあたりから歩いてやってき

NOT FOR PUBLIC RELEASE

て、そう言うかもしれない。

自分の見たこと、感じたことを百パーセント信じているつもりでいた。しかしわずかな、それがすべて自分の勘違いであって、亜由美たちが悪いイタズラである可能性も捨て切れずにいた。

確かめたかった。

「亜由美さんは、いま、どうしているんですか？」

「それがねえ、困ってるんです。夫士教授の推薦もあって、短期留学が急に決まって、出発しちゃったんです」

「え？」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「こんなところだそうですよ」
剛介が携帯の画面を見せる。
南国のリゾートを思わせる石畳みンガの建物。
光線がまぶしい。
「そこは？」
「パルダ王国です。ご存知でしょう？天然資源が豊富で、小さな国ですけど、日本とも深いつながりがあります」
「聞いたことはあります。東南アジアですね。国民の幸福度が高いらしいとか……。ブータンほどではないらしいですけど」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「そうなんです。基本、貧しい人がいませんからね。政治も安定していますし。日本に比べたら天国ですよ」

「独裁国、ですよね？」

「まあ、一長一短あるでしょうね。[illegible]がなか立派な国立大学があって、亜由美さんは今[illegible]この国へ向かったそうです」

「今日！」

「ええ。今日ですよ。なにか、妙で[illegible]う？」

安里咲は思う。あれだけのダメージを受けた人間が国外に出られるのだろうか。飛行機に乗るところなど

NOT FOR PUBLIC RELEASE

想像できない。

亜由美は無事なのだ。あれはやはり芝居だった……。

あそこにいた、未知の言葉を話す黒人たち。彼らはその王国と関係があるのではないか。

「いいよなあ、留学なんて。そのうち、末土教授のところに、向こうの生活についての写真とかメールが来ると思いますよ。うらやましいです」

「それで？」

「彼女にやってもらおうと思っていた助手を、誰かに代わってもらいたいんです」

わたしは剛介を見た。ウソをついているようには見

NOT FOR PUBLIC RELEASE

えない。二年しか上ではないのに、すっかり大人に見える。目が鋭いのが気になるぐらいでナンパされて付き合ってもいいという女性はたくさんいそうだ。

わたしのタイプではないけども。

…。別の忌まわしい記憶に触れそうになって、頭を振った。いまはそんなことは関係ない。

「誰でもいいわけじゃないんです。ぼくじゃダメだって言われてしまいました。難しい役目ですからね」

「亜由美さんって、講義のとき、みんなからいろいろ言われていましたけど……」

登美子たちが激しく攻撃していたのである。あれも

NOT FOR PUBLIC RELEASE

末土教授の実験なのだろうか。

「とくに女性からの反発がすごかったですね。ああいう役は、誰もやりたがりません。亜由美さんはすごく頭がよくて、一発で教授に気に入られて、あれを引き受けたんですけどね。たまたまその前に申請していた留学を、向こうが受け入れてくれたのだから……」

「そうなんですか」

「おそらく、亜由美さんはあっちの大学でしばらく心理学を勉強して、それからアメリカの大学へ移ると思います」

「アメリカ！　どうして」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「パルダ王国の国立大学は、アメリカ屈指の名門大学と深い関係があるんです。かなり有名な教授がわざわざやってきて講義をしていたし、インターネットでアメリカの生の講義に参加できたりするんです」

「すごいですね」

「あの王国は天然資源を除いて人材しかないわけですから。人を育てることにお金を惜しまないんですね。観光開発はしません。観光ビザはまず出ません。江戸時代の鎖国に喩える人もいますね。国土が狭いので、荒らされたくないのかもしれません。建物もシンガポールやドバイのような高層ビルを建てたりせず、古い

NOT FOR PUBLIC RELEASE

植民地時代のものを、いまでも大切に使っているそうです」

「亜由美さんはすごいんですね」

「そんなことないですよ」

剛介はさらりと言う。

「教授によると、安里咲さんの方が学力、語学力でもずっと高いらしいじゃないですか。亜由美さんは、ぼくに言わせれば少し焦っていましたね。この大学に入ったものの、目標を見失いかけていたんでしょう」

そんなことを言われたら自分だって同じだ。四月に入学し五月になって、早くも興奮は冷め、教授も学生

NOT FOR PUBLIC RELEASE

も、自分が想像したようなレベルではないような気がしていた。

本当にここでいいのだろ[illegible]

末土教授から声がかかり[illegible]験の手伝いを頼まれたときは、チャンスがあると[illegible]た。自分の人生がこれで変わるかもしれない。この[illegible]学へ来た意味が見いだせるような出会いがあるか[illegible]ない。

ところが、そこで目にしたものは、自分の人生でこれまで想像したこともないような最悪の世界だった。陰湿で残虐で暴力的な世界だった。

あれがすべて芝居だったとしても、裸の亜由美を見

NOT FOR PUBLIC RELEASE

ているし、亜由美の肌がどうなっていたか、間近で見ている。

演技もあっただろう。だが、実際に亜由美も傷ついていたに違いない。

あんな異常な世界。

わたしには耐えられない。

そしてさっきは、三人に意地悪なことを言われ、責められた。彼女たちにも目をつけられた。

ますますこの大学にいる意味を見失いつつあった。

「たぶん、安里咲さんは、末土教授を誤解しています」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「え？」

剛介は爽やかな笑顔を見せた。

「末土教授は誤解される存在なんですよ。そう仕向けているんです。困ったものだ。あれでも、すごく美しい奥さんがいますし、研究論文は海外で高く評価されています」

その話は耳にしたことがあった。

「わたしなんかにできることでしょうか？」

「できますよ。末土教授と一緒に、嫌われ者になる覚悟があるならね！」

剛介の笑顔につられて、思わず笑ってしまう。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「あ、安里咲さん、笑うとすごくきれいですね」
「やめてください」
「ごめん。亜由美さんにも怒られましたよ。ぼくはちょっと口が軽いのかな」
「あ、いえ」
剛介は先輩である。安里咲は恐縮する。
「いいんです。嫌われ者になると、いいことがいっぱいありますよ」
「ホントですか？」
「ええ。つまらない誘いが来なくなるし、ホントにわかり合った者だけで、どんどん先に進むことができま

NOT FOR PUBLIC RELEASE

すし。第一、脳天気に楽しそうにしているバカ者どもに付き合う必要がなくなりますからね」

安里咲はため息をついた。

自分をなじりにきた三人の顔が浮かぶ。彼女たちは徒党を組むのが好きで、わがままのような一人でいても平気な者を嫌う。ああいう人たちと付き合うのは面倒なことだった。

嫌われるのが前提なら、それも苦ではないかもしれない。

「でも、嫌われるんですよね？」

「そうです」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「メリットがなさすぎません？　四年も耐えられるかしら」

「大丈夫。亜由美さんみたいに留学すればいいんです」

「留学はダメです。親が許さないでしょう。お金もかかるし」

「あれ、言いませんでしたっけ？　パルダ王国は大金持ちなんですよ。そこの審査に受かった学生は留学費用なんていりません。支度金のほかに、留学中もなんだかんだと手当を貰えます。世界中から優秀な学生を募っていますよ」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「うそ！」
「ホントですよ。じゃなきゃ蚩由美さんだって行きませんよ。彼女の家だってそんな裕福じゃない。この大学にはすごい金持ちの子どもいるでしょう？　普通のサラリーマンの家の子どもなんて、ぼくもそうなんだけど、まったく太刀打ちできません。まして留学なんてね」
「剛介さんは、行かないんですか？」
「受かりません。男女ともに少数の募集です。日本は特別な枠があるんです。末土教授はあの国と太いパイプがあるらしいから……。だけど、競争率はめちゃく

NOT FOR PUBLIC RELEASE

ちゃ高い。あくまでウワサですが、国立大学には王族の子女もいるわけです。とくに男の子があの国では多いらしい。その中で日本人女性への強い憧れがあるんじゃないでしょうか。なんだ[illegible]。男は落ちて、女性は受かるらしいんですよ」

「ホントですか？」

剛介の冗談だろう。

女性が優遇されるサービスは世の中にあるものの、女子大生を優遇する国があるなどと聞いたことはない。だったら写真審査でもあるのでは。水着審査とか……。

裸になって？

NOT FOR PUBLIC RELEASE

亜由美のことを連想する。彼女はあの実験で留学に合格したのではないか。裸にされてすべてをさらけ出し、向こうの国から派遣されたあの黒人たちに認められたとき、彼女は合格となったのだ！

まさか。

だとしたら、わたしは留学しない。そこまでして行きたいとは思わない。あのように汚されて、ケモノの悦びに浸るのはゴメンだ。

「安里咲さんは、モテそうだから、どうします？　王族から付き合ってくれって言われたら……」

「そんな……」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

笑ったが少し不自然だったかもしれない。あの拷問をしていた黒人たちこそ、そ[illegible]土族の連中ではないか。

「マジメな話。ケタ違いの[illegible]金[illegible]ちですからね。この大学にいる金持ちの学生ども[illegible]になっても勝てないですよ」

「そんなに？」

「天然ガスの輸出だけでどれだけ稼いでいるか、あとで調べてみたらいいですよ」

妙な気持ちになっていた。

あのボロボロにされていたように見えた亜由美が、いまは南国のすばらしいキャンパスにいる。そして王

NOT FOR PUBLIC RELEASE

族の子女と一緒に、アメリカの一流大学の教授の講義を受けている……。

もし体を使ったとしても、それは、すごいことだ。汚らわしいが、自分の力で[illegible]ものだ。わたしにはとうてい、真似できないが……。

「募集は年に一度ですか？」

「そうですね。たしか二度あ[illegible]と思います。春と秋。いまからでも秋の募集に間に合うでしょう」

「亜由美さんの場合は？」

「大学に入ってすぐ申請して四月末に発表の選考で合格。五月にはもう向こうですからね。八月の選考で、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一四年三月　第一版　二〇一六年九月　第二版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。

NOT FOR PUBLIC RELEASE